

俳句的なことながら

(7)

鈴木しづ子という俳人—その2—

中嶋 嶺雄

鈴木しづ子の第一句集「春雷」が羽生書房から出たのは終戦の翌年であった。ヘノートするは支那興に史はるの雷」とか「東京と生死をちかう盛夏かな」と詠んでいた戦時中の製図工少女は、へあきさめや指をそめたる塗料の黄」といった強い色彩感を表現したり、「夫ならぬひとによりそう青嵐」と自己表出したりする二十代半ばの女性になっていた。

師の巨湫は「春雷」の序文で、「長き夜や掌もてさすりしうすき胸」の句を示しながら、「私がこの少女を識つたのは彼が勤めてゐた工場の俳句会であった。眼のくりくりした見るところ快活さうな人柄であった」と述べ、その彼女がへ霜の葉やふところと秘む熱の指の句が示すように、「以前とはちがった静かな心でわが身をいとしみ育んでゐるであろう。私は彼をいとしく思う。彼の名を鈴木しづ子」と紹介している。

彼女は「春雷」の跋文で、「句は私の生命でございます。俳聖芭蕉の詩情神に一步でもちかづくべく、こののちともより一層の努力をいたす心組にございます」と殊勝な心情を吐露していた。その心のとおり、へいにしへのてぶりの屠蘇をくみにけり」といった古格の句を処女句集の巻頭を選んだのはしづ子自身であった。

そのしづ子がやがて第二句集「指環」では、先の「夏みかん」や「実栢櫛」をはじめ「性悲し夜更けの蜘蛛を殺しけり」へ体内に君が血流る正座に耐う」などの句を示して世間の関心をかきたて、脚光を一身に浴びるのだが、「指環」はいま私の手許にある「樹海」昭和二十六年七月号の「鈴木しづ子特輯」を元にしたものであった。

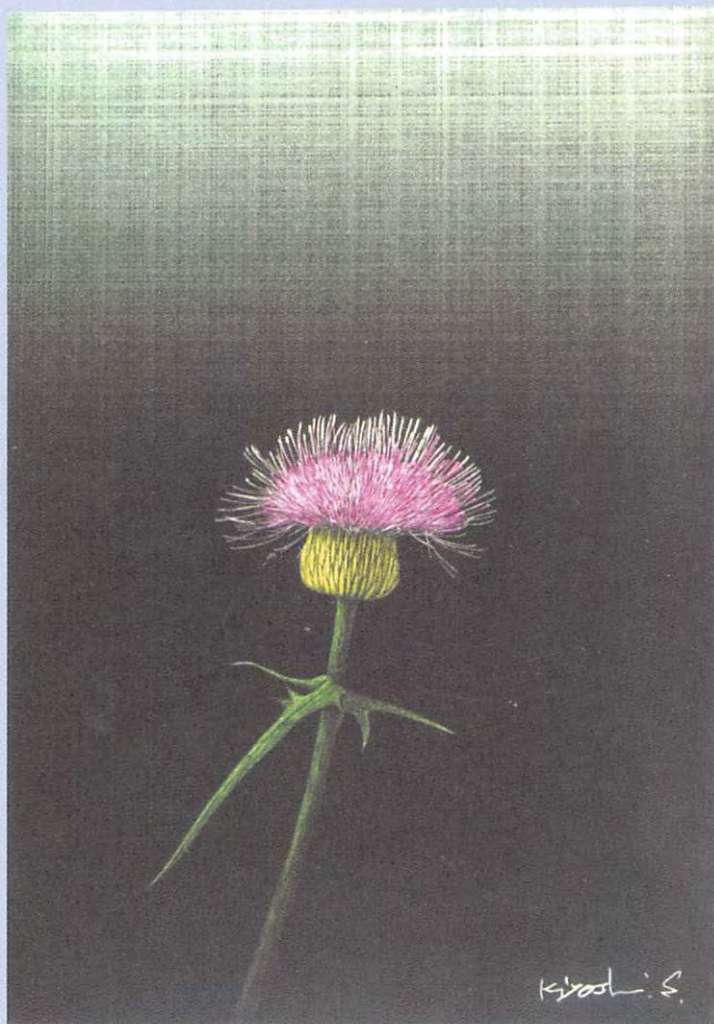
(国際社会学者)

目次(220号)

俳句的なことながら(7)	表紙絵	斉藤 清	1
俳冠抄	題字	佐藤 文子	2
風のロンド		中嶋 嶺雄	3
竹の皮			4
百地蔵		佐藤 文子	5
俳句アングル		高橋 美穂	6
邂逅集			7
五句選	平方 明生	百瀬みつ江 西村 允	18
梓集			17
しなの茶房	小澤 斉子	久保田 一	16
風発		松田 千寿	25
溪流	堀	恒人 野井 文生	26
	上條 勝六 矢口 香山		27
一句の衝撃	早川 里子	村中 離山 伊藤みち子	29
一句一会	古畑 和	金田みずほ	30
青嶺集			31
青樹集			32
萌芽集			33
追悼(滝沢増夫氏)		松沢 多門	39
久女雑感(17)		増田 連	40
万華鏡			41
せせらぎ		笠原 千佳	42
例会作品			43
文箱			44

信濃俳句通信

平成七年四月十九日 第三種郵便物許可
平成十五年九月十日発行（毎月一回十日発行）
第十九卷第九号九月号（通卷二二二号）



2003 9月号